

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

最近の世の中は、好のむと好のまざるとを問わず、経済界では国際社会の一員として世界の流れの風を読み、空気、いわゆる大気ではなく相手国の雰囲気等を考察、学び考えなければならない時代へと変化した。

しかる後に、海外進出しないと大失敗をこうむることになる。安易な人件費が安いからとの進出は決してやるべきでないと考える。

世のなかの変化を知り、変化を生かす経営は、まず進出相手国によって、物の見方、考え方が文化人類学的、宗教的価値観によって大きく異なるのである。

日本的価値観だけでは、相互理解を妨げ、利害が衝突する、ここに、それぞれの相手国の教育、環境等による超自我 (Superego) が存在する。

いわゆる意識や行動の主体をなす心が存在するのである。そういう意味で「迷頭認影」を考え学び、小学校高学年の英語教育の必要性を「英語とお経の素読のすゝめ」で、何故、英語教育なのかを考えていただき「唯識哲学を学び考える」で進出相手国の見えざる「心」の働き方について以下、考究することにした。

それは、日本人の心の奥底に流れているキリスト教、仏教等を受け入れ、本来の信仰対象やおよろずのかみの八百万神との習合思想の源点となっている多元論 (Pluralism)、いわゆる相互に独立な多くの根本的な原理や要素を認める考え方等について愚考した。

この世界観なくしては、かならず失敗する。これからは「仏教心のない経済活動は善業ぜんぎょう (道徳) とはいえず、菩薩道なき経済活動は悪業あくごう (不道徳) の世界である」ということをきもに命じ、業ごうではなく業なりあいとしての国際社会での競争に参加すべきと考える。

著者：広島大学生物生産学部非常勤講師

元近畿大学産業理工学部客員教授

日本禅画家協会名誉理事

中国少林書画院名誉教授

法号位 法印 禅画位 奥伝

青木伸雄

釋 禪 禪 (野風生)

雅号 樹泉

2. 迷頭認影を学び心眼の実践

仏教の教えに「迷頭認影」という言葉がある。一般に「迷頭認影」という教えは、読んで字の如く、頭が迷い、本質 (Essence) いわゆる変化する現象的存在の事実に対し、その背後または内奥に潜む恒常的なもの (形而上学的立場に立つと実体としての存在と考えられる現象) が理解されず、物事の判断が出来ず、本当に存在しない幻影げんえいが生じ、あるように見えることである。何故、「迷頭認影」という現象が生じ人々が本質を知らず幻影にまどわされ、判断をまちがえるのか真剣に考え、高度情報技術化社会での対応すべき心眼や迷頭認影について、以下考究することにする。

「心眼」とは、物事の真理、真相や要点をはっきりと見分ける鋭い心の働きであり、本当のこと、まことの道理を認識し判断する英智のことである。

混沌としたカオスの時代にあって迷頭認影におちいらない真理の認識の方式について考える。

一般に真理 (本当のこと、まことの道理) の認識の方式には、真理の三つの立場がある。

1) 対応説 (Correspondence Theory)

観念 (認識する英智、知性) と実在との合致によって「真」が成立すると考える立場。

2) 整合説 (Coherence Theory)

当の観念、認識する英智等が整合的な観念体系の内部で適合するときに「真」が成立するという考え方である。

3) 実用主義説 (Pragmatism Theory)

仮説と事実によって検証されたときに「真」が成

